修論要旨

古代中國人の夢
－儒家と道家を中心に－

西林眞紀子

はじめに

この論文を書くきっかけとなったのは、蜂屋邦夫著「中國思想における夢」(『東京大学教養講座14　夢と人間』東京大學出版社・1986年７月）を讀んだことである。はじめは中國思想を學ぶことを非常に難しいものと思い込んでいたが、讀み終えるとその印象は少し變った。古代中國人の夢は現在では考えられないほど個人の人生や社會と密接に關係していることに驚いた。そして夢を通して思想や文化を知ることは面白いと思った。

そこで私も古代中國人がどのような夢を見たか、また夢とはどのような存在であったかについて詳しく知りたいと思った。そして、夢を通して中國文化の特質や古代中國人の考え方の一端を明らかにしていきたい。

對象とする時代は、春秋・戰國を中心とし、その前後、西周から兩漢までを含めた。中國文化の基本は周代あたりにみることができ、それは、秦代、漢代にも受け繼がれてきたから、夢についてもこのあたりまでのものに視點をあてることにする。根本を明らかにしていけば、現在を含めた中國の文化や思想の全體を理解することにもつながると思うからである。以下、古代というのは全てこの時代を指す。

特に古代中國人は、夢は現實を豫知するものという意識が強く、夢と人間精神との關りというよりも、天や神、先祖との關係のほうが目立つ。一方、夢のなかで人生の眞理を得ようとした思想家の存在も大きい。このような面がうかがえるのは、特に、儒家と道家の夢である。そこで、儒家と道家は中國の思想の中心となるものであるという理由からも、今回はこの二方面の夢に的を絞ることにした。ただし、本論文で言う儒家の範圍は嚴密なものではなく、爲政者等を含めて考えている。まずは兩者の夢は、どのようなものであり、どのように解釋されたか、それぞれの特徴は何であるかを明らかにしたうえで、雙方を照合し共通點や相違點について檢討する。このようなかたちで進めれば中國の思想がより明らかになるのではないかと思う。

以下、本論文で論述した、儒家の夢、道家の夢についてと、儒家と道家の夢の同異について記す。また、『大東アジア學論集』２號に引き續き、檢討した「類書に收録された夢」の分布表からみた、夢の收録狀況と特徴について述べる。

１．儒家の夢

儒家の夢の話には、夢のなかに天帝や先祖が現われて、お告げをしたものが多く、特に、夢は國家に大きく關わっていた。例えば、王朝内の重要なことを決定するのに夢は欠かせず、夢に天命を受け、やがて王朝が開かれて、

維持されていくのも、すべて王がよく天を祭り德があるためとされた。

また、夢がいかに重視されたかということは、一年の終わりに、國王の夢の、吉夢と惡夢の別をはっきりとさせ、國で決められた儀式にそって、それぞれ對處されなければならなかったことからもうかがえた。その儀式は占夢の官が擔當し、民の吉夢を受け取って國王に捧げたり、惡夢を追い拂う儀式を行なった。惡夢の話を通して、夢の威力の凄まじさ、夢の對應法についてみることができた。

儒家の夢は天との關わりが強いことから、儒家を代表する孔子の數々の發言を取りあげて、天についての意識について見た。そして、孔子の夢は儒家思想のなかでも最もよく知られるため、いくつかの先行研究に據りながら、夢に對する意識について檢討した。孔子の天に對する意識は、およそ次のようである。

天は善惡を見通す力を持っており、善い行ないに對しては福を與え、惡い行ないに對しては罰を與えたり、見放してしまう。そのため、天命には決して逆うことができないという。この發想は儒家の夢の話に多くみえた。

また、孔子は、天が自分に仁義道德の道を生きて、天下を救濟する使命と、その德をさずけたのであるという意識をもっていた。人生の全てが天意によるものである、人の壽命も天が決定するものであると受けとめていたことも、儒家の夢の話に多くうかがえた。

以上のことから、孔子は、目に見えない天を、心底信じていた。孔子は怪力亂神を語らなかったといわれるが、それは、愼重になったからこそ、氣輕に話せなかっただけとも言える。このことは、夢に對しても同じことであり、孔子にとって夢とは、理想とした周公のお告げを受け取る場であり、大事なものとして深刻にとらえた。これは、夢を天の命令や先祖の意思の表われとして、受け入れていた古代中國人の考え方を孔子も引き繼いでいたということであろう。

儒家の夢と天命に對する意識の具體的なことについては、およそ次の通りである。夢に天命がくだる話から、夢は天が何かを要求する場でもあったことが見えた。夢で天に要求されたことをそのまま實行すれば、天から福を授けられたことから、物事の禍福は、全て天によるものという意識があったことがうかがえた。

夢のなかに天が現われて、お告げをする仕方は、言葉でそのまま傳えるものと、象徵や比喩の形をとって傳えるものとがあった。後者の場合は、占いによって解釋する必要があった。

その他、夢と占いについてや、夢と巫、夢と魂について述べた。

占いについては、次の通りである。夢のなかで天命をはっきりと言葉で傳えられたり、夢のなかに現われる者の奇妙な姿によって、占わなくても、祥か不祥かの區別は、およそつけられる場合もあった。ただし、夢が具體的に何の不祥を示しているのかは、占いによって明らかにされなければならなかった。不祥と思われる夢でも、占いで吉夢と出ることもあったからである。

一方、夢を見たとき、政治をとるものに、落ち度があることを象徵する日食のように、何か特殊な現象が同時に重なった場合は、夢自體は非常に奇妙な夢でありながらも、問題にされないこともあった。

さらに、夢占と卜占の兩方が合うことは、最高の吉兆と解釋されることもうかがえた。

そして、占いが重大な事であったことについては、夢を占い、その結果が占い通りにならなかった場合は、占った者が責められ、誅

殺されることもあったことにうかがえた。占う者は、夢の禍が自分の身にまで及ぶことを心配して、うその占いの結果を告げ、逃げてしまうこともあった。夢は、夢を見たものだけでなく、周圍の者まで巻き込むほど凄まじい威力をもっていた。

巫については、次の通りである。巫には不思議な能力があり、夢を見る者と同じ夢を見ることができたり、靈が乘り移って代辯することもできた。また、1章3に取り上げた『尚書』「召誥（しょうこう）」に、天帝は巫にくだることが見えるように、巫と天の關係は密接であった。

夢と魂についてについては、およそ次の通りである。天以外に、夢のなかに先祖や死者の靈が現われて、子孫に前もって危險を知らせたり、後繼者を決定したり、祭ってほしいと要求をしたりと、様々な意志が傳えられた。これらの夢を見た後、夢を見た者は、靈の意志を尊重し、必ずお告げを實行しなければならなかった。

また、夢に、まだ會ったことのない人が現われる場合もあった。その際は、夢に現われた人物は、天から授けられた者であり、實在すると解釋された。夢は、まだ會ったことのない人との交流を果たす場であるとされた。

夢のなかに天や神、靈などが現われる場合には、死が關わっていることもあった。夢のなかで豫告された禍から逃れるために、夢を見た當事者は、無理やり惡夢を吉夢に變えようとしたり、惡夢を占わなかったり、話さないようにしたりというように様々に對處した。しかし、これらの對處法は、ほとんど役立たなかったことからすると、どんな手段を使っても惡夢の禍を避けることは非常に難しかったことがうかがえる。

以上のように、儒家の夢については、夢と天命、孔子の夢と天、その他、惡夢の話を通して、夢の威力の凄まじさ、夢の對應法についてみた。また、夢と魂の關係について論述した。

2．道家の夢

道家の夢については、次のことを論述した。

道家は、思想を述べる際に、夢を使った。ただし、扱われた夢は、先祖や精靈、神亀、髑髏、生きている人間など、様々なものとの精神の交流の場とされることが多く、その點からすると、儒家と道家は、共通するといえる。

『列子』「周穆王」では、現實と夢について、精神と肉體の關係から述べられている。目が覺めているときは、八つの意識（故、爲、得、喪、哀、樂、生）が現われ、夢を見ているときは、六つの意識（正夢、噩夢、思夢、寤夢、喜夢、懼夢）が現われるという。そして、目が覺めているときの知覺現象は、肉體と外物の接觸によるものとされ、夢を見ているときの意識は、精神と外物の接觸によるものとされる。

聖人・眞人のあり方を通してみれば、精神が外物と接觸しないためには、目が覺めているときの知覺現象や、夢を見ているときの意識を、萬物が様々に變化する動きの一相にすぎないとし、精神を平靜な状態にすればよいということになる。聖人・眞人は、目が覺めているときは、我れをも忘れて無心の境地に至っており、寢ているときは夢みることもないという。

一人の身に起る、生氣が溢れたり、活力が欠乏したりという盛衰變化は、天地大の自然の在り方と共通するとされる。そこで、夢には陰が陰を呼び、陽が陽を呼ぶ同類のものと、陰が陽を求め、陽が陰を求める相互補完的なものがあるという。同類のものは、現實と夢の關係は陰陽の相互關係にあり、相應しあっ

ているとされる。

相互補完的なものは、夢と現實のつりあいを上手くすれば憂いがなくなるとされる。現實が苦であれば夢は樂であり、現實が樂であれば夢は苦であるというように、相互補完的であり、現實生活を調整すれば、夢の状態が變わることになる。

續いて、『莊子』に據って、夢は心の亂れによって起こるものとされた點を見た。心が亂れている状態とは、智惠を使ったり、自分が正しいと意識したり、相手を價値づけたり、本性を見失っていることをいう。その心の亂れを取り除くためには、人知・人爲を棄て去り、本性を守り、人間關係の身分の上下などがある世俗の世界を離れ、悠々と自由に生きればよいとされる。或いは、世俗のなかで生きるとしても、生死の變化を天地自然の働きとして考え、それに從えばよいとされる。

そこで、自分自身さえも忘れた境地に至り、身が枯れ木のように、心が火の消えた灰のように、まるで死んでいるかのように、靜かな状態になるという。

人知・人爲を取り除き、萬物を齊同とし、天然自然の本性に從って生きてゆけばよいという。そのようにすれば、心の亂れがなくなり、夢も見なくなるという状態になり、これは、聖人・眞人の窮極的な境地といえる。窮極的な境地を表すものとしては、「物化」の思想もある。これは、「齊物論」の、蝴蝶の夢の話に出るものであるが、蝴蝶となれば、蝴蝶として生きればよく、人間であれば、人間として生きればよいということである。ただ天然自然に變化するのに任せて、自由自在に物化すればよいという。

人の生死は、氣が集ったり散ったりするにすぎないとする思想や、身の周りにある自然の物全てを、自分の死ぬときの葬儀の品物とし、どのように葬られようともかまわないとしたり、死は休息であるとする思想などがある。

死の惱みを超越するために述べられていることとしては、これらは、生死の變化を天地自然のはたらきとし、それに從って生きるという思想である。

その境地に至った人から見れば、人の一生も、夢にすぎない。そのような立場からみれば、現實に執著する必要はなく、さらに言えば、夢と現實の區別も立てる必要もなくなる。

以上のように、道家の夢について、夢と現實の關係、夢と魂の關係、聖人の夢などの點から檢討した。全體を通してみると、まず、夢を見るのは、精神が外物と接觸するためであるとされる。夢でうなされることから解放されるために、夢と現實のバランスを調整すればよいという思想が見えた。そして、夢でうなされる問題だけに留まらず、心の亂れ自體を取り除く方法へと發展し、それは、聖人・眞人の生き方を通して述べられていた。夢を通して現實の惱みを超越する思想が見られた。

3．儒家と道家の同異

儒家の夢と、道家の夢を檢討したことを踏まえ、儒家と道家の同異について、次のことを論述した。

儒家も道家も、夢に非常に關心をもっていたことは、兩者の大きな共通點である。儒家が主に夢を天や先祖のお告げの場であるとか、何かの豫兆であると考えていたことと、道家が自分の思想を説くための題材として、夢を用いたという點では、兩者は大きく異なる。ただし、いくつかの共通意識もうかがうことができた。以下、儒家と道家の夢の同異について、夢と天、夢と魂、夢と死などの關係や、

先祖や何かの靈などが、夢のなかに現われるものを通して述べる。

儒家の場合は、夢のなかで、天命がくだされる話が多い。一方、道家の場合は、聖人・眞人の境地を、夢や天を使って、思想を述べている。そこからうかがえる天とは、儒家のような天帝ではなく、天地自然の天であり、人爲的なものとは逆の立場にある。

儒家の場合は、夢のなかに天が現われて、お告げをする仕方は、言葉でそのまま傳えるものと、象徴や比喩の形をとって傳えるものとが見えるが、道家の用いた夢を見る限り、象徴と比喩の形をとって傳えるものは使わず、言葉で告げるものが使われていることが目立つ。それも、道家が自分の思想を説くための題材として、夢を用いたためといえよう。

夢は天帝・先祖・死者の意志を聞く場であったということは、儒家の夢の話からうかがえた。また、道家の、一時的な手段として用いられた夢の話からもうかがえる。そして、兩者の夢の話には、夢のなかに靈が姿を變えて出ること、死者が生者に意志を傳えること、先祖が現われてお告げをすることなどの、共通點がうかがえる。このことの意味は、當時の中國社會のあり方と關聯させて考察する必要がある。

儒家よりも道家の方が、夢のなかに現われる對象が神秘的である。たとえば、夢のなかに神龜や神蛇、櫟(れき)の精靈、髑髏などが現われる。このことに關聯して言えば、儒家の夢の話では、惡夢に様々な方法で對處したが、惡夢の禍から逃れることは、できなかったことが見える。惡夢を見て、占いで禍の豫兆を知ることができたとしても、それを防ぐことができず、知には限界があるということになる。これは、道家の神龜の話に通じるように思われる。

古代中國人が、夢は先祖のお告げにも關わるものであると、純粋に信じていたことは、儒家と道家の夢の話を通してうかがえることである。さらに、夢のなかに先祖が現われてお告げをしたことは、占わなくても、そのまま理解できるという、儒家と道家の共通の意識もうかがえる。

儒家と道家の夢を通してみる魂のあり方から、古代中國人の魂に對する意識の強さがうかがえた。夢のなかに魂が現われて、人に祟ったり、子孫に恩惠を施したため、魂をよく祭ることが、極めて重要とされた。それは、儒家の夢の話にうかがえ、夢のなかの魂は、現實生活や人の生命に直接影響を與えるものであった。

一方、道家の夢の話には、肉體から離れた魂が、夢のなかで自由に往來し、絶對眞理の世界へ行くことができるということが見える。ここでは、絶對の眞理は、身心を調整して得られるものではなく、私情で求めようとしても得られるものではないという。眞理を得るために、無欲無心で、人知と人爲を忘れ、自分自身を、萬物の一つとする。動きを天地陰陽の氣の運行と同じくし、自然に生滅變化すれば、夢のなかでこそ眞理は得られるという思想が述べられている。

夢と現實の關係についてみると、儒家の場合は、夢のなかのお告げに從ったように、夢のできごとは、現實の生活のなかに取り入れられていた。

一方、道家の場合は、夢と現實の關係を、精神と肉體の關係から考えるやり方が見える。目が覺めているときの知覺現象は、肉體と外物の接觸によるものとされ、夢を見ているときの意識は、精神と外物の接觸によるものとされる。

夢を判斷する際に、その人の德のあり方を

判定の基準に入れる場合が、儒家の夢の話に見える。たとえば、王が天命に關わる夢を見た場合、それは、王が德を持っているから、天命が下ったのであると解釋された。また、夢のなかに現われた天命は、民意が反映したものとされる場合もあった。道家の扱う夢の話にも、夢を占わずに、王が見た夢は、先祖のお告げであり、天から優れた人物を授けられたのだと確信したことが見える。

夢のなかで、天帝から壽命を告げられるという意識は、儒家の夢を通して見える。孔子も、「兩楹の間に坐奠せらる」という夢を見て、天から壽命が盡きたことを示されたことを悟り、素直に受け入れた。

一方、道家は、夢のなかで、壽命を知るということはなく、夢に關する思想を、死生觀と一緒に述べることが多い。自分の生命を天然自然のものとし、生死を心靜かに受け入れる。超越した生き方を通して、夢と現實、生と死の區別などにあれこれ頭を惱まさず、死も物化にすぎない、死を悲しまないという思想が見える。これらは、人生もそのまま夢であるとする境地になって得られるといえる。

4．類書に收録された夢について

（分布表は、『大東アジア學論集』第２號に掲載）

本論文では、儒家と道家に見られる夢を中心に論述した。それは、儒家と道家は、古代中國思想の代表的なものであるからである。ただ、それらが夢の事例のうちのどの程度を占めるのかは、それらの檢討だけでは明らかでない。

そこで、付録として類書に收録された夢を分布表にまとめ、そのなかにおける儒家と道家の夢の位置について檢討した。類書を扱う理由は、そこには夢の代表的な事例が集められていると考えられるからである。

一應の目安とするため、扱った事例を、經部・史部・子部・集部・叢書部の５部に、おおまかに分類した。まず、分類した部ごとの夢の收録状況について觸れてから、全體のなかの儒家と道家の夢の位置を檢討した。

また、收録率の多い夢と、本論文中で扱った夢の事例の關係について檢討した。

類書６點に收録された夢の話は全部で約320點ほどあり、分類した部ごとの夢の收録状況については、前號で述べた。付け加えるとすれば、５部のなかで、儒家と道家は、それぞれどのような位置にあるかというと、經部は、５部のなかでも收録率が多い。それに比べて、子部の收録率が少ないため、儒家の夢は、非常に注目されたことがうかがえる。兩者の共通點は、『白氏六帖事類集』『太平御覽』『淵鑒類函』によく取り上げられていること、特に、『白氏六帖事類集』『淵鑒類函』に同じものが收録されていること、『北堂書鈔』『藝文類聚』『初學記』においてはわずかであることである。

以下、收録率の多い夢、『春秋左氏傳』の夢、孔子の夢、『尚書』「説命・上」の夢、本文中で參考として扱った夢の例、道家の夢について記す。

(1)收録率の多い夢

類書６點中、４點以上の類書に收録された夢の話は、約320點中、29例ほどある。特に、『太平御覽』『淵鑒類函』は、その收録率が多く、『太平御覽』は全例（但し夢部門以外の２例を含む）を、『淵鑒類函』は27例を收めている。

最も收録率の多いものは１點を除く全部（５點）の類書に取り上げられている。すなわち、『逸周書』「程寤篇」（『帝王世紀』）、『尚書』「説命・上」（『史記』「殷本紀」）、『春秋左氏傳』

「宣公３年」、『後漢書』「蔡茂傳」、『呉志』「孫皓傳」、『蜀志』「蔣苑傳」、『晉書』「王濬傳」、『辛氏三秦記』、『莊子』「齊物論」（蝴蝶）、「外物」（神龜）の10例である。これらは、古くから永く傳えられた夢といえる。

それらのうち、『逸周書』「程寤篇」、『尚書』「説命・上」、『春秋左氏傳』「宣公３年」は、本文中の儒家の夢に使用したものと重複する。これらの夢の話は、天のお告げに關わっている點で共通する。

また、『莊子』「齊物論」、「外物論」は、本文中の道家の夢に使用したものと重複する。兩者とも、夢の話を使って思想が述べられたものである。それぞれ、「齊物論」では、夢と現實の區別に執著せずに、物化の世界に生きる思想が述べられ、「外物」では、夢の中に神龜が現われる話を用いて、人知・人爲を超越した生き方が述べられている。儒家も道家も、兩者ともに、それぞれの夢の特徴がみえるものが注目されたといえる。

⑵『春秋左氏傳』の夢

『春秋左氏傳』には、全30例ほどの夢の話がある。そのうち21例ほどが、各類書に選擇されている。最も多い17例を收めるのは『太平御覽』である。續いて『白氏六帖事類集』は13例、『淵鑒類函』は、12例を收録している。『北堂書鈔』『藝文類聚』『初學記』が取り入れたものは、３點を合わせても６例しかない。その６例とは、宣公３年（蘭）、成公10年（病）、成公16年（射月）、昭公元年（虞）、昭公７年（黄熊）、哀公７年（社宮）である。

なかでも宣公３年、成公10年、16年、昭公７年（黄熊）の收録率は多い。それらは、本文中で儒家の夢の話と例として、扱ったものと一致する。それらの夢の話は、おおまかにいえば、夢は先祖のお告げの場、死者が生者に要求する場とされる。また、巫が夢を見通す特殊な能力をもっていたこと、また、夢と何かを象徴する特殊なものが重なった場合、夢が重んじられなかったこと、夢の威力が夢を見たものだけでなく、周圍のものにまで影響したことなどがうかがえる。このなかで、特に夢がお告げの場であることについては、道家が手段とした夢の話の中にもうかがえ、儒家と道家の共通意識であることを本論文中で指摘した。

『白氏六帖事類集』『太平御覽』『淵鑒類函』についてみると、『白氏六帖事類集』『淵鑒類函』の２點にはあるが、『太平御覽』に收められていないものは、僖公15年、成公17年である。兩者ともに不吉な内容の夢であり、僖公15年は、妖夢を消すという内容のもの、成公17年は、奇妙な夢を見て、恐ろしくて占わないでいたところ、話すとすぐに死んでしまった、という話である。これらの例から古代中國人がいかに夢を恐れたか、いかに夢を信じたかがわかる例は、『太平御覽』では扱われず、『白氏六帖事類集』『淵鑒類函』では用いられたことが分かる。この類の夢の話は、本論文中の儒家のところで取り上げた。古代中國人は、悪夢から逃れようと様々に對處したが、ほとんどの場合、悪夢の禍から逃れられなかったことを述べた。

『太平御覽』だけにあるのは、僖公28年（夢河神）、成公２年、昭公元年、昭公７年、昭公17年、哀公17年、と６點もあるが、『太平御覽』は經部全體を通しても、ほとんどの例を網羅的に取り入れているため、『白氏六帖事類集』『淵鑒類函』に共通しない例は、３點のみ、というのが目立つ。すなわち、昭公７年（夢康叔）、襄公18年は『白氏六帖事類集』にあり、『淵鑒類函』にはなく、昭公７年（夢襄公）は『淵鑒類函』にあり、『白氏六帖事

類集』にない。僖公28年は、夢に現われた河神の要求に逆うと不祥であること、襄公18年は、夢を見た者と巫が見た夢が一致したこと、昭公７年は、君が二人の夢に現われて世繼ぎには、だれそれがいいと同じお告げをしたことである。

全21例中『白氏六帖事類集』は14例、『淵鑒類函』は12例を收めているなか、３點を除く全てが共通する點に、何らかの選擇基準があると思われ、『淵鑒類函』は『白氏六帖事類集』を參考にしたことが考えられる。本文中で扱ったほとんどの夢は、收録率の多い夢と重複している。

⑶孔子の夢

儒家思想と夢という觀點から考えると、孔子の夢は最もよく知られる。本論文中では、孔子の夢から、夢は、お告げを受け取る場とする意識がみえる。天の命令や先祖の意思を尊重し、受け入れていた古代中國人のやり方を孔子も引き繼いでおり、それが夢に反映したものであろうということを述べた。

收録状況については、『白氏六帖事類集』『太平御覽』『淵鑒類函』の３點に收められている。３點に集中的に收録されるというのは、經部にみられる特徴でもあることから、全體からみれば、收録率が多いといえよう。本論文中で扱った、孔子が夢のなかで壽命が盡きたことを悟った話が見える『禮記』「壇弓·上」も、その３點に收められている。

⑷『尚書』「説命・上」の夢

『尚書』「説命・上」は、『北堂書鈔』（帝王部）、『初學記』（總敍帝王部）、『白氏六帖事類集』（夢部門）、『太平御覽』（吉夢、地部２點、皇王部、職官部、人事部）、『淵鑒類函』（夢３）の５點の類書に、合計10ヶ所收録されている。非常に多く取り上げられ、永く受け繼がれた夢と言えよう。夢を通して、夢に登場した人物は、實際に存在するものと考えられていたことがうかがえる。また、夢をいぶかしがらずに素直に實行した、ということからも、古代中國人がいかに天命を強く信じ、從っていたか、ということを知ることができる。

⑸本文中で參考として扱った夢の例

『逸周書』「程寤篇」は、『北堂書鈔』（后妃部）、『藝文類聚』（夢部門、木部２點、鱗介部）、『白氏六帖事類集』、『太平御覽』（吉夢上、皇王部、木部３點）、『淵鑒類函』（夢２）の５點の類書に合計12ヶ所と、非常に多く取り上げられており、後まで受け繼がれた貴重な夢であるといえよう。夢から、夢が國家に關わる重要なものであったことがわかる。本文中では、儒家の夢の參考例として用いた。

また、儒家の場合、夢のなかに先祖や死者の靈が現われてお告げをしたり、意志を傳達したものは多い。夢は、魂とその子孫や關係者とが感應できる場であった。そのことは、『後漢書』「温序傳」、『後漢書』「范式傳」にもうかがえるため、本文中で使用した。

『後漢書』「温序傳」は、『北堂書鈔』（禮儀部）、『藝文類聚』（夢部門）、『太平御覽』（吉夢下）、『淵鑒類函』（夢２）の類書４點に收められている。『北堂書鈔』以外は全て夢部門に收録されている。

『後漢書』「范式傳」は、『藝文類聚』（夢部門）、『白氏六帖事類集』、『太平御覽』（敍夢）、『淵鑒類函』（夢２・他２點）にある。類書４點の全てが夢部門に收録されている。兩者とも、夢として重きを置かれたものと言えよう。

⑹道家の夢

『莊子』「齊物論」の、蝴蝶の夢の話は、道

家の夢のなかでも、最もよく取り上げられていることは既に述べた。『北堂書鈔』を除く全てに收められている。その他、本文で取り上げた『莊子』『列子』『淮南子』の、夢の話のほとんどは、『太平御覽』に收録されていることが目立つ。次に多いのが『淵鑒類函』であり、『白氏六帖事類集』は『莊子』を多く取り入れている。

以上のことから、全體を通して、收録率の多い夢は、本論文中に使用したものと、おおむね重複しているといえる。